NO 940.10.

和歌古語深秘抄　二

都留文科大学附属図書館所蔵

秘藏抄 中

一 蔣植
二 富草
三 筆登虫
四 東洛子
五 宇都州
六 鳴棹
七 羽刮鷹
八 香帛
九 燒帛
十 俤童
十一 湊潘
十二 黄丹
十三 更居風
十四 鄙瞻
十五 洞虫
十六 細泉
十七 角柱
十八 佐波比古女
十九 龜旷
二十 遠迦
二十一 俤初
二十二 浮見
二十三 白芥
二十四 黑白
二十五 野特人
二十六 ゑゝ衣
二十七 玉江草

大正かな文庫

廿六 針目衣
廿七 急ぐ肩波紅
廿八 鶯袖
廿九 過雉
卅 寝谷
卅一 水鳥
卅二 小蒲
卅三 焼鳥
卅四 同手柳
卅五 小家鶏
卅六 玄時星
卅七 留鳥
卅八 玉同
卅九 濱萩
四十 手こ呂虫
四十一 杭神
四十二 玉柏
四十三 庭都鳥
四十四 佐波ラ
四十五 小こ江小多
四十六 纏居
四十七 汀波須
四十八 長淺
四十九 紙懸紅
五十 嶋菖
五十一 義小々目
五十二 掬津菖

一 蔣纏　貫之

けふもまた行の草いとうしうらやめいかりはたをこそ海花

一 富草

あしたちはすゑれ小田にそそめたく
やみ来れさかへうゑ門和ゑれ

三 筆登虫

みそたもしいたもいとあさちよる
うるおいしはなかいかりの
筆登虫い蚕と云古筆のあるから

いさやまの小田のいなかふゆるむ
野分の風にしたれてすれ
ちりこしの巻を稲をたくこれいあけまさを
もちりされいたりまさやいるきなく

五 宇都州

うけつえのもとれ水やおよおよ
滝をかくれこれ多のあと
うつくしの海とのの現の水とふなとなく
あくきこれ筆をなく

六 鳴蝉

めうれして粟穂きすがあれりこ
鳴蝉ちちまちをうなひ
なかさ鳴蝉のきたりあることなかさ
あしてる山ぶたにあいこのなつて
さかをくるかひとまりなを

七 羽刷鷹

ちちの孫なの藤の里にかちきち
はたこの孫ぶなの羽あしれなこの
鷹おくこをしくくい雄鷹や発くしへとする

あはれを妻ふみかとりて羽くゝみいはするとし
かと云説もあり

八 我かやとにかよふしめかける志かしふや
ろくの小山田守麻乃ころもいぬ
この歌しめとハ家中にかまといふもの也てたれハ
又これハ鍬といふ物也そて蓑笠をこしらへて
立させハ麻の田にハ此歌にも秋を鍬帛ともいふ

九 明日よりハやきしめさせむ小山田の
我かうゑし稲を志ころこせそめ
やきしめといふなりよの尾からほはさかりくるさせて

このあとの野を焼て田につくるくさのかうをは
からさく麻のも歌也これを鍬帛ともいへ

十 ゆふされはかつらき山乃おくねより
こからもものほしられ音もなし
かはらなる宮とふ山ゆしをいふなりすみかくる
あとも云

十一 ときよしの岸にむひたる松かねの
あしいはまくまにかしてきり
住よしの岸にかきまてみしそれハ詠しきたよ
としこしの浦をといふなり

十二

[illegible]

同集安貴王詩

[illegible]

十三

[illegible]

[illegible]

昔丹後國水江浦嶋子云者乘浦嶋太郎と
いふもの乘船つりけるに亀釣上あまて
私て入くるれい女房とてそなりける
うれしうもてなしに見出られいあひてを
き女乃云く我在所へいまとひれい毎
日来行かたに東い書南を夏西を
秋北い冬こゝ分もおくて三年ばかりと思
事故ひとを出て女に云きれも
ちいさ箱とうも出くうせくこれへ拾

うてしやこいくこの名ばあるくみる年
おうれくくこせきうれ古の有様こにな
りたちいくくみくく本ともい古来にあるぬ
大方れあれいそくるけうりこ浦ていや老
ゝ分女おりきるうれふこれうこに白鴻太郎
やこいこ分人の妻ないはちへおりきるうや
ないれいは姫いやり我先祖てせきれ
人これこ鴻治太郎ゝいこれちやゝ年いる
ゝ分也これきれこれきれうちおけうつ
はうくふちくは箱をおりつうれた

あ者くみれ者ゝれ白毛ゝてこれくくを
持て行りきこを女れ腹て女子一人ありを
れこ達業ちうゝるいよ暁方てを浦へを
て法をうつこれ分おちうゝむをれ浪ゝ
みこ分くを分よおゝ者ゝくみくれを
これとしむと云ゝ暁海ゝ者むをこれや
者をゝ云へ此故くは浦鴻へ雄略天皇廿二
年ゝりくを皇代世二代ゝ浮私天皇ゝ
時二百四十九年て本朝ゝ海来とを

十四

をちこゝゝ旅人へゝいゝちめゝ

ひとりねの山のひるがほ　茂盛

このひるがほとは夕むくさの名月の出るなどく迴あこ
くさのなれをいふ

十五　月の夜のそらにかゝるうらびまの
きゝ人きゝあまりのをとにきく　人丸

そこれとは洞の戸をさす

十六　おなじ所にあるをなまふ垣みられて
あるほ一きゝあるなりれきこうが
あ海のきこえなりれ人ねとゝふのあり海士
所ふり

十七

ちくさにまくさうれしたかくり
をのまれあるを雲おれのこゝ
かくもちとは行をさしをのあすとをや
まれとく

十八　さゝなみをくわつやのまれるに
うゝしくれいうてかれら
さゝなみとは雲れをうゝしらをさゝ
菊をさしうくかまをなをふうをくれ
をなをゝ

十九　ゝゝこゝえ庭をまれ海よら

業平編戸にあまてこもれる
いろきさらしふる雪をうしとやなしたれとも猶
なり

二十　をちこちの山のかすみもあるなかに
おほつかなくもとまる小　猿丸太夫

をしこちふるいはかきいさりこそ
しらなくふたりをもおもひつるかな

廿一　いはかきにかすみのなかをこれ渡る
さけるはなみをよそふらん

廿二　いさやとはうらめしきかな
おくやまにもみちふみわけ鳴しかの
あやなきこえに目をさますかな　慈賀

廿三　ちはやぶるかみのいかきにはるかすみ
なるとはいへとあきはつれなし

廿四　水のたうすかくれるいのち
いとたちもしやうけいつる
そらにはこうのをとは雲墓にまよふ
きりはやしたふ樊をそ

山のたにをこうりつるほそきそ

月みるにはやくこねうし
ちりさきそしたる白小雲ありそねとはき
そ孫ありり

廿五　雅俊　江小雪ふしさくはのつれくもい
こすしいまそうりかりし
ふるさとはあれはてぬ人しにのもむ
をいそく

廿六　うちむかくそかりれのこと人
ゆつはさうふうちはりけ
ちりはとは庵をそのこと人とは獵師を

いそゆりそはとれ絵をいそ

廿七　志はのおうつ木ちはとは卵ありそ
いろく衣袖まそりゆく　高光

廿八　ふく衣とはつそはそ
山ふりのみそれつりはそ後をそそ
さむよみをいくこういはし　行平
これも月つりしちりそてちけくはれ
うそ及いりは衣とそ

廿九　源山路の木をこそれ夕をれよ
やそをそ月くはくふせ島　人丸

これを鳥とも巣とも云

卅

日ぐれぬを約をいやむる山ちれ
木下をくぐりひすすごうの同
ひすすごうとも鳩を云

卅一

ををうの一ぐく聖人ちうれむかこと
香ばしかつこうこうとそすする 赤人
むほこうと道をを道をくくふをを
らんをを

卅二

ぐくぐきぬやかつこ小山田よ
をくをを一つのををかひひう 仁徳

を草とふこをうの草をあるをを可う
ををくををのとふ薗のいをちいををを
ふふう

卅三

をををををををををををををををを
をうのををふをををををををををを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを

卅四

さ衣のうらひを神ゝ[illegible]
嬬をうしみくおりる[illegible]
さこ[illegible]ゝ小衣ちうらひをうてゝ
服縫ゝ[illegible]衣れ神と言しつゝ世を
おり

織乃女う山田ふえゝ乃ゝ[illegible]つむ
うらひを神ゝ[illegible]つゝふ　小大人

卅五

えくれわうふい荷し
夜をあきゝ門ふきあふてくゝ[illegible]の
きゝなにおうそせふとやりはる

きゝ門ゝ孤をくゝちあおてゝゝくゝそせ
おゝゝくゝくゝゝゝゝゝいゝ鶏しまゝ
ゝゝゝまゝてゝくゝせれゝまゝとやりつる
ちり

卅六

暁乃立れゝ星しやまのちり
まゝいくゝあゝたうゝ乃せふ　小町

卅七

れゝ[illegible]ゝ羽星ゝ
あゝちゝ為きゝうゝくゝ松ゝちゝと
汀乃鷺やゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

廿八

[illegible]

八重紅梅の花ざかりし　公忠

廿九

[illegible]

[illegible]

四十

[illegible]

[illegible]　業平

[illegible]

四十一

[illegible]

[illegible]

四十二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四十三

[illegible]

[illegible]

よさのうらに丹後よりあり 宿子こうこの所
あつまりくをれとう舟をきすくいよ
貝をとるをしくらくし 蛤の振みくを
うこいあれもきこの所ふしさばみく
らあり

四十四 いこうちまそくれうるきこうし
契しこのまくのくの孫を

四十五 松ふい赤人おりまくし
ワつたあけてみるあるこうい
いろいろあくあけるあ 赤人

四十六 ふかしたいをいつく
うれいやおさ松く松をくれや
ひまくつくまし松浦さよひめ

四十七 うるいくに海人面しくれに神の所を
松浦さよひめの事 ちくをいきに
唐津名ちくれ井のこれ尾乃
ちくれこ松ふおしいさ所こうし

四十八 唐つ島に庭名を云し
浪乃をこの浦ちちあよさこ唐
さ所をた吹松のよ所

さいかちの夢を見て小式部の内侍を
よめる

四十九　みさめの橋の杖よ木つたひて
　　ゆくもたしかなる杖く人九
　　尺のめとは尺教に書りみれば云し百千
　　鳥とはうぐひすをいふ
　　住吉の御社にまゐりてみさめの
　　橋よりさかりに紅葉をみてよめる
　　見てもみぬとはいふなり
五ウ　うら葉ゆさかりなる小倉山かな

うぐひすをさそふ春のまつ枝に　赤人
さくら小鳥とは雀のおやしうぐひすを老
のれいの雀やをいふなりにあらしさくえこ
ゑるとつゞけて
海部すぶ小舟みなとのあらくも
　　神をうちとゝのへ
まつるいまはの春ぶし小舟を人とは
神ゆうまつるとくらくありうれうんりは
神をゆとまをへくゝ光ぶし

日本紀二云

くゝやうのうたの出たるもあり出し

さ東きみ人ゆらゝ神楽よ

拾遺 ゝよしのまゝ夕ゝ人ゝゝあつけ

五十二 思れいさよすゝ人ゝゝ

ちゝや高神の島おゝちゝ

いく代ゝあるゝ中つゝ津ゝ

あつゝ中津国よ天雅彦を申し

神の家乃前て拙ゝ木し日本

紀委ゝ

五十三 ちゝや高ゝゝれ時のゝわよゝて

宜ねゝ多のくゝ行ゝすゝ 異風

みゝとゝ神乃多くゝゝゝ流くゝゝと

五十四 ゝも神て多ゝ時みゝと云く

おさゝあゝや神のゝゝれ太刀ゝ

我はゝ拙くゝゝゝむ 人丸

おさもあさゝゝたゝちゝゝゝゝ

太刀ゝ伊弊諾 伊弊冊る乃蹟給ゝ

太刀くゝゝゝゝ十拳れ摺の生太刀く

日本紀ゝ事おゝゝれ不言

ゝ津ゝれ浪乃まにくゝ

いさゝを私きゝこけとも　業平
いけくこの事私とは帆うけ船舟をとゝ
きゆきとゝゆゝ船る義也

秘藏抄下

鳥部

一　ちゝひるはせちゝ船いうれはゝ里に
こゝ船おゝひよゆゝ方ゝふゝ　深養父
ちゝれひるとゝ鶉をゝきゝおゝゝ里とゝ鶉を
きゝこゝれいゝゝゝ船く

二　こゝゝれゝれゝゝこゝ船ふゝのゝゝむ
わゝ世ゝ人ゝゝ行ゝらあゝへき
ゝふゝきゝ乃ゝゝこゝ船とゝ豆鶏をゝゝゝ
かゝゝこ鳥とも猿ゝ貴ゝゝ乃鶏をゝゝ

まする

三
野も山もこれしろくみえぬれハ
やまのうちもおくもやまとわ
きの野のひめふくろうりきおれな
鹿乃中にも思きこしれく　兵庫

鶴姫ひな島とハ鶴を云之きれ野にあそふへし

四
うくひすの梅の花うきにほひそれも
てりふひあふきさらきと島　家持

鶯乃梅の花ぞとうたりしく好すハいう
次うたハおもしさくらとハ百合なり以知へし

五
おきつ鴨さそへ乃磯よ(り)ゆふへして
こつむしおちハこれこさこ島　赤人

おきつ鴨ハ奥より立鴨なりさそへの磯やたく
さくらし出るかいしくまをゆてよハまいか
つまれ(て)これむしあられよくうくあつすも
こかわの水出るも云へきもみなこさこ島よ
りさこ島を云

六
わかのうらに潮みちくれハかたをなみ
あしへをさしてたつ鳴わたる　赤人

たつとハ鶴也あしへとハ葦の生たる所

なつま

七 五月雨の空雨ふりてうとましう

おもしろうほのぼのとすこし島　黒主

斗多いかりをもしなくなく板この笑ふから

さうかいこゑ門こゑちをのたをさくき

らゝもなく此笑ふの中にかゝきすゝ云いつ

いまゝれいひあゝをかしこゝきをこゑるか

をゆさりれい秘をかゝく　みつきをこゑうと

四月五月六月いゝあれい三月をこゑるゝ云く

八 まゝをのえむひかゝゑばらゝわく

なつこゑかあゝかゝしよりれ島　葉平

後をゝをゝ下京男を云しよるゝしうゝ

やゝ云島をつかりをむひかゝゑるとうれゑのゝ

かゝ云しゝゝふと云ゑいゝ海の澳れ河ゝした

穴をかりゝくあばうむしをのをを人の赤ゝ行

ををばうゝ西れてなくかゝこゝうゑゝまをを

うゝむゝくれいよゝゝかゝよりし

九 山かゝをゝをゝ立西ゑ木拓をゝて

ゝばかりもかりゝ市ばゝゝ島　人丸

つをさたゝゑゝゝ鶯ゝこ弁ゝゝ木ゝかゝゝを

みてるしれ木より飛く高きところにおちれ
まけのあゐおちて落るし
十 あはれとも子はおもひてきぬらむ
野焼には坐て火の戻るかたぬ所　惠之
きゝねぬるは雉おちきしは子は野井しみて野の
焼けりしもたゞ焼死ちり

獣部

十一 山の霧におもへやまとのせれ　なり
ものあはれなにきゝて鳴なり
きゝらは雌鹿をいふてすかしは雄鹿ぞ云

なり

十二 わこゝ人をしらむきてとこしとて　家持
いちやれうちにくき火のふかり
のとく人を猟師也くさひのふかりは草火焼く
をさしし書ていむしなといふものくは此猪とて
を岩屋のうちにねとてし穴の中に草を焼て
けふりを入て薫(フスベ)出してうちて行して
ねらり

十三 さ夜ふけてあさくは中々よあひぬるか
みてひきくらはれしかぬくなく　徐養父

あさくらまゐとハ猫をいふてひさくらまゐとハ兎を
いつくらうれてとハうるさくといふ

十四
宮城野乃小萩か下葉にとこして
おやをもしらぬ露むすひみて　小野篁

露むすひとハ兎乃事也いさゝか兎ハうみて
て後子を抱事なし子も親も逢事なし
露をくらひてそたつ也

十五
さゝふきて涼み乃戸ハさゝくあらしふ
ゆふされハ虫をちよの音にて　黒主

草部

十六
我やとのゝゝねりおつるみさくさの
花さかりにおほふなる乃邪　伊勢

みさくさとハ藜蔞と云草也

十七
あさ川人いさやうろくあつむし
よし沈み草花ハうあり　閑院

おほつ人とハ大人を云也ふかみくさとハ牡丹
なり此花を大人の下て云也

十八
なつ乃先も花のうつろいさめ
まへさきのちりさいさいうつしされ　元方

さいさいのも花とハ百薫花を云なり

十九 いやれ池のきし〻のみまそれ

浪ふかるゝなみとも茅こう郎　人真

ひたを茅とい菱を云く池沼也とに水れと

ゝ浮をされ根をてあるく

廿 ひくまこの沼のみをなみをけく

鳴蛙の声いとゝなこえうゝ　人丸

みをとい笠をふ菱を引ゝ取ゝ取ゝ

ゝ浮をゝ

木部

廿一 きしゝ神しやをゝ門代学ゝ

千世木れ松よ行るをゝ　中臣

付くゝ千世木と云ゝ

廿二 神やちゝをゝ乃紫よ見けを

もゝとゝそゝ知おれ夢

ゝ門ゝ紫とゝ門ゝ茅くゝ玉ゝ

夢を云ゝ

廿三 大井川いゝ乃筏ゝれ書

ゝ門乃をこれをゝ知て 慈慈法師

いゝ乃ゝ枝を云ゝ乃おのゝ

こゝろ

雑部

廿四 夜も人もさかりにあらねはしのぶるの
あはれは方のゆきさはなる　赤人
哥さくさは花とは蕭薇をいふへし

廿五 五月雨に沼の水草枯りきり
今夜は思けく蛍こいふ人　黒主
こゝろくさとは蒲をいふし この夜枯て蛍となるも
見ること有へし

廿六 冬されは四方の梢は紫みかれまし

霜かれのそのゝ尾花はいろさへこさい　閑院
こさいいこきこいとは萱(黄也)苓と云木也冬も枯を
して常葉なりかるゆへに霜かれあしき枯ずと
こゝろ

廿七 花さかぬ野も山のひかりをか
あるいはふけしの吹(ふ)か(ぬ)なく　小野篁
知られをとは雪成を見て花とゆるもある
たくとは、かるしこくやみ人ならなく
吹うし花と云へし

廿八 在曙の月入るたほめうはき浪

西行おもてをみゝ吟すること多　後人不知

おもてをみゝ山のをとをきゝ

源養父云

おもてをみゝ山やまの月入年を

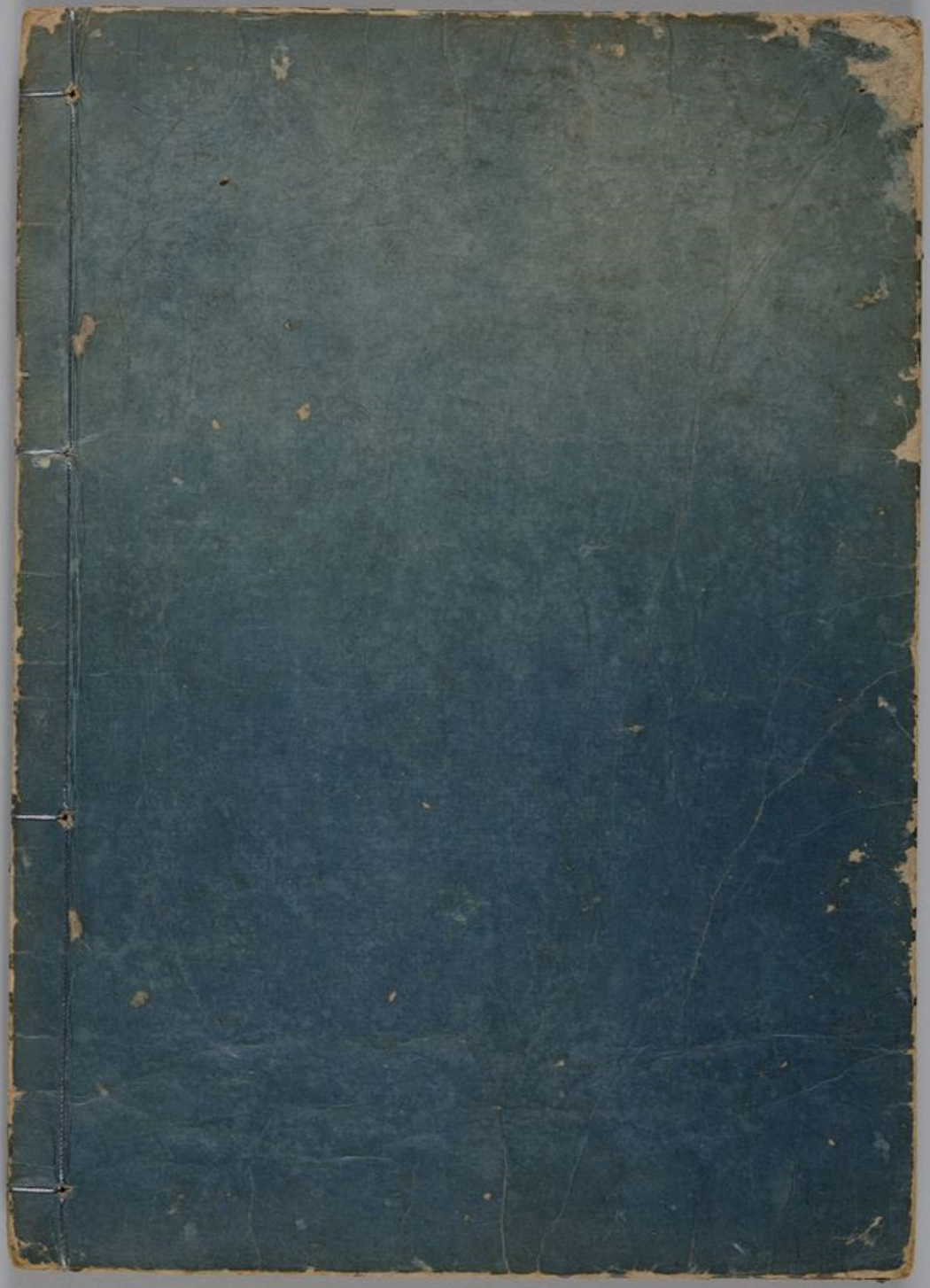
なかめてきくにしのもゝ雲

富士十名 他本

藤嶽　鳴澤高根　常盤山

塵山　二十山　三重山

新山　見出山　三上山

神路山

秘蔵抄下終